

もくじ

花畑大鷲神社獅子舞奉納2025... P1
遡及年号板碑について... P3

大鷲神社の拝殿前で披露される岡崎の舞



足立史談

第691号

2025年9月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集部
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

はなはた おお とり じん じゃ

花畑大鷲神社獅子舞奉納2025

郷土博物館

■炎天下の舞 二〇二五年七月十九日(日)、花畑大鷲神社(足立区花畑七丁目一六一八)において奉納獅子舞が行われました。本稿では、長らく続いてきた獅子舞の現在の姿をお伝えします。

当日は、午前八時から神社境内の設営が始まり、観覧席となるテントやかき氷の屋台などの組み立てが着々と進んでいきます。一方、獅子舞の行列がスタートする福寿院(花畑六丁目一五一二)では、舞い手たちが着替えたり横笛の練習をしたりしながら待機していました。午前十時を回ると、御神酒とお茶でお清めを済ませた舞い手たちの行列が始まります。行列は警察官の誘導に従いながら、「花畑大鷲神社獅子舞保存会」の幟を先頭に、四名の花笠(菅笠型で、緋垂幕と藤花で顔周りを囲ったもの。頭頂部の飾りは牡丹の花が二名・日輪と三日月が一名ずつ)、御幣(ごへい)持ち、大獅子・中獅子・母獅子(かかじし)の三匹獅子、横笛方衆と続き、大鷲神社へと向かっていきました。

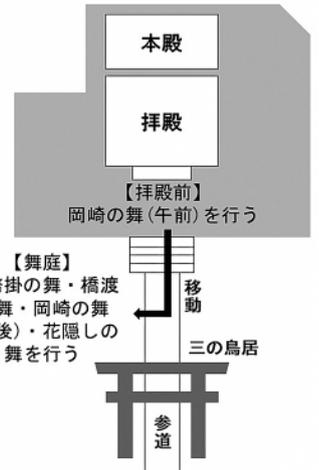
獅子舞は、岡崎の舞・幣掛り(へいがかり・ひがかり)の舞・橋渡りの舞・花隠しの舞の四曲からなり、午前中に岡崎の舞・幣掛りの舞・橋渡りの舞、午後には二度目となる岡崎の舞・幣掛りの舞、



照り返しの激しい路面を進む獅子舞の行列

花隠しの舞が舞われます。またこれらとは別に、各舞の始めと終わりに出入りの舞が、福寿院から出発する時と戻る時に道行(みちゆき)の舞が舞われます。

神社ではまず、拝殿を背にする形で御幣持ちが座り、四隅には花笠が立ち、その中で獅子たちが岡崎の舞を舞いました。その後、階段を下った先に設けられた舞庭(柱四本を立てて竹を渡し、葦簾を被せたもの)に場所を移して舞が続きます。様々な舞が披露される中で、保存会の会員がマイクをとり、舞い手は誰か、この舞の意味は何か、見どころはどこかといった解説を行いました。この解説は、見物客にもそれぞれの舞の意味を理解したうえで楽しんでもらいたいとの思いから、数年前に始められたものです。



獅子舞の場所は2か所

をしています。「一人立三匹獅子」と呼ばれるこの種の獅子舞は東日本に多く分布し、都内では廃絶・中止されたものも含め八十か所以上の所在が確認されています(注一)。

様々な舞の中でもひとときを目を引くのが、終盤に演じられる花隠しの舞です。各地の三匹獅子に見られる舞の一つで、多くは「雌獅子隠し(めじしかくし)。牝獅子隠し、女獅子隠しとも」と呼ばれます。雌獅子が姿を消してしま

い、二匹の雄の獅子が、どちらが先に雌獅子を見つけられるか競いながら探し回るといふ筋立ては概ね共通しています。足立区鹿浜の獅子舞も、一匹の雌獅子を二匹の雄獅子が取り合って争うという筋の舞があります(注二)。他方、大鷲神社では、母獅子とその子で兄である大獅子、弟の中獅子の三匹が街に繰り出したところ、人混みの中で母獅子が姿を消してしまい、兄弟で探し回ると説明される点が特徴的です。雄獅子同士が相手を欺こうとする所作にも違いがあります。花畑では、中獅子が先に母獅子を見つけて独り占めしようとするため、大獅子が手に持っているばちで地面に印を書き、中獅子の関心をそちらに向けさせようとします。鹿浜でも同様に中獅子が先に母獅子を見つめますが、こちらの大獅子は

子は鈴を中獅子にあげるふりをして気を惹こうとします(注三)。このように、大筋は共通していても、獅子同士の関係や細かい所作、その意味づけは様々であり、各地域の歩みや伝承の独自性を垣間見ることができ

獅子舞の担い手たち

獅子舞は花畑大鷲神社獅子舞保存会と鷲宿町会(わしじゅくちようかい)が実行・保存の中心となっており、獅子舞奉納の際は、花畑大鷲神社若鷲会(わかわけいかい)と鷲宿町子供会が協力するという構成をとります。若鷲会は境内において無料の射的・輪投げコーナーの運営と、かき氷・ラムネの販売を行い、鷲宿町会子供会は花笠役と笛の奏者を務めました。

現在、獅子舞の練習は一年を通じて毎月一回、本番の一月前からほぼ毎日行っています。仕事や学校のある人がほとんどなので、練習時間は夜に設けています。また元々は、獅子舞の舞い手は男性のみと決まっており、女性が舞うことは禁じられていました。しかし今から十五年ほど前に、どうしても舞いたいと声をあげた女性がおり、それ以来女性も舞い手として認められることとなりました。



初めて獅子舞を披露した竹内さん

今年獅子舞デビューを果たした中学二年生です。午前中の橋渡りの舞と、午後の御幣掛りの舞において母獅子に扮し、大人にも負けない堂々とした舞を披露しました。大鷲神社の獅子舞は、女性も舞い手に加わる、暑さ対策をとる、舞の解説を行うなど時代に応じて形を変えつつも、欠かすことのできない夏の行事として今日も花畑の地に息づいています。

【脚注】

(注一) 笹原亮二「三匹獅子舞の分布」『国立民族学博物館研究報告』(二十六・二)、一七一頁〜二三六頁、二〇一〇年

(注二) 東京都足立区教育委員会民俗調査団『足立区文化財調査報告書 民俗編』、九頁、一九八五年

(注三) 前掲書(二)、九〜十頁

(郷土博物館専門員 伊藤早穂子)

またこの日は多くの奉納者が神社を訪ね、受付で金一封金を奉納し、返礼品として「悪疫退除之神符」と書かれた御札がついた藤の造花、酒、札状が入った紙袋を受け取っていました。

三匹獅子舞について

大鷲神社の獅子舞は、舞い手が一人ずつ三匹の獅子に扮します。獅子頭は黒い顔で、角の有無や形状がそれぞれ違っており、胴には締太鼓をくくりつけた姿

竹内陽菜(たけうちひな)さんは、

そきゅうねんごういたび 遡及年号板碑について 関口 崇史

■板碑の紀年銘

中世に数多く造立された板碑の史料的特徴として「その全てに紀年銘が刻まれている」点が挙げられる（千々和、一九八八年）。区内に現存する板碑の紀年銘に注目すると、改元前にもかかわらず改元後の新年号を刻む四基の板碑を確認できる。なお、本稿では、改元前に新年号が使用された板碑を「遡及年号板碑」と呼称する。

■遡及年号

遡及年号は古文書においてもその使用が確認されている。服部英雄氏は遡及年号が使用された古文書の多くが偽文書である、と報告している（服部氏は遡及年号を「未来年号」とする。服部、一九八三年）。一方、千々和和氏は仏像の造像銘が板碑と性格が比較的近いとして、次の「埼玉県行田市長福寺阿弥陀如来坐像膝裏墨書銘」を紹介し、検討している。

正慶元年申壬正月十一日造始
同癸酉十月下旬奉修造也、

正慶の改元は元徳四年（一一三二）八月二十九日で正月十一日時点では元徳四年が正しく、「同癸酉」は正慶二年に当たる。造立開始から完成までの期間はわずか一年であり、改元の日を忘れたという単純なもので

はないとし、改元の年を呼ぶのに新年号を用いることが一般の意識の中に広く存在していた可能性を指摘し、板碑や仏像の造像銘の遡及年号の使用が、ただちに、改竄や偽物を示すものではないとしている（千々和、一九八八年）。

■四基の「遡及年号板碑」

次に、区内現存の「遡及年号板碑」を紹介する。

【拓影1】

No1・宝徳元年（二四四九）六月五日

*報徳元年の干支は「己巳」同板碑は「己卯」
（扇 瑞応寺）
【部分拡大】参照



【部分拡大】
拓影で確認できるようにいずれも上部に主尊（阿弥陀修種子）、下に人名を刻み、それを挟むように右に年、左に月日が刻まれている。

【拓影2】

No2・長祿元年（二四五七）四月三十日

（入谷 南光寺）



【表】 遡及年号板碑

| | 紀年名 | 改元日 | 西 曆 | 人 名 | 所在地 |
|---|-----------|------------|------|-------|-------------------------|
| 1 | 宝徳元年6月5日 | 文安6年7月28日 | 1449 | 慶弥阿闍梨 | 扇 瑞応寺 |
| 2 | 長禄元年4月30日 | 康正3年9月28日 | 1457 | 妙西禅尼 | 入谷 南光寺 |
| 3 | 延徳元年6月29日 | 長享3年8月21日 | 1489 | 妙西禅尼 | 足立区立郷土博物館 (花畑 実性寺旧在) |
| 4 | 大永元年7月27日 | 永正18年8月23日 | 1521 | 妙教童女 | 谷在家 本応寺 |



【拓影4】
No.4・大永元年（一五二一）七月二十七日

（谷在家 本応寺）



【拓影3】
No.3・延徳元年（一四八九）六月二十九日

（足立区立郷土博物館
*花畑 実性寺旧在）

■遡及年号が意味するもの 板碑の紀年銘は造立日、または、被供養者の忌日のいずれかと理解されている。それでは、四基の板碑はどちらに該当するのであろうか。これらの紀年銘が造立日ならば造立時点の紀年銘を刻めば良いのではないか。改元後であっても、改元が伝わっていないのであれば旧年号が使用されたであろう。

一方、板碑造立の発願日が刻まれた場合、発願は改元前の時期であったが、造立は改元後であったので、発願の紀年銘に新年号がさかのぼって用いられたという可能性である。前述の千々和氏の指摘を踏まえて考えれば、四基の紀年銘は造立発願日である可能性もあるのではないだろうか。このことは、今後の板碑の造立供養の実態の解明により明らかになるものと思われる。

（足立区文化財調査員）

【参考文献】

服部英雄「未来年号考・文書の日付とそれが書かれた日」(『古文書研究』二〇、一九八三年)
千々和到『板碑とその時代―てぢかな文化財・みぢかな中世―』(平凡社、一九八八年)
太田まり子「板碑の紀年銘」(『季刊 考古学』第一四七号、二〇一九年)